

アルフレッド・ミュラーアルマックの 経済秩序論

鉢 野 正 樹

Die Wirtschaftsordnungstheorie Alfred Müller-Armacks

Masaki Hachino

Zusammenfassung

- §1. Das wissenschaftliche Leben Müller-Armacks läßt sich in drei Phasen einteilen, in denen er konjunkturpolitische, religiös soziologische und wirtschaftspolitische Arbeiten leistet. Er nennt sein ganzes Leben „Wirtschaftspolitik als Beruf.“ Gerade mit der „Wirtschaftspolitik“ widmet er sich dem Wiederaufbau des Staates.
- §2. Sein Leben als Wirtschaftspolitik erreicht seinen Höhepunkt, wenn er mit Ludwig Erhart nach Gestaltung der „Sozialen Marktwirtschaft“ und der „Wirtschaftsgemeinschaft Europas“ strebt. Sie hat die Einigung Deutschlands sowie Europas zum Endziel.
- §3. Seine Wirtschaftspolitik dreht sich immer um eine soziale Irenik, in der es sich um eine ideologische Versöhnung — Liberalismus, Nationalismus und Sozialismus — handelt. Aber die ideologische Versöhnung muß ihren rechten Grund in der religiösen Irenik — Katholizismus, Luthertum und Calvinismus — suchen. So wird seine Politik „Wirtschaftspolitik als Irenik“ genannt.

一、ミュラーアルマックの学問的生涯

(一) 社会的市場経済 — その源泉

1973年6月、ミュラーアルマックはボンで開催された「社会的市場経済」の研究会に出席し講演を行なった。⁽¹⁾ 当日の講演内容は、「社会的市場経済 — その学問的源泉」⁽²⁾ (Die Wissenschaftliche Ursprünge der Sozialen Marktwirtschaft 1973年) によって知られる。ミュラーアルマックの七二才、他界の五年前のことであった。

社会的市場経済が西ドイツの地に呱呱の声をあげてから二五年、経済復興の輝やかな業績にもかかわらず、この経済体制への批判の聲が高まった。社会的市場経済には理論がないと言

鉢野正樹

う者、倫理がないと言う者、マルクス主義者は資本主義の亜流ときめつけ、日和見主義者ももっと新しい経済体制を、未来主義者は計画こそ科学であるとの経済体制を批判した。⁽³⁾

ある構成的主体が歴史の中に誕生する。しばらくの間は周囲の賞賛を受けている。しかし、この構成的主体が困難な事態に遭遇し伸び悩む時が来る。すると、批判は内から外から浴びせかけられる。構成的主体は、この試練の時をどう切り抜けるべきなのだろうか？ これを切り抜ける道はただ一つ、歴史の源流に帰る他はない。ちなみに、ドイツ語“試練” — Heim-suchung⁽⁴⁾ — は“求郷”の意味をもつ。人類の歴史は、源流へ帰っただけそれだけ前へと進んでいる。

社会的市場経済は、元来、階級のイデオロギーでも、多数党の綱領でもない。源流を過去に求め時流に逆い続けた少数者の⁽⁵⁾理念であった。社会的市場経済の源流は何処にあったか？ 二十世紀初頭、ドイツにおける⁽⁶⁾経済学と⁽⁷⁾人間学の研究にその源流を汲むのである。この両学問は、更にその共通の源流をドイツ歴史主義の中にもっている。

二十世紀初頭、ドイツの経済学者は十六世紀ヨーロッパに成立した経済体制 — 資本主義 — の研究に没頭していた。資本主義は、自由主義の旗の下に目ざましい発展を遂げ世界経済を形成するまでになっていた。しかし、国家の内外には経済的社会的問題が生じていた。資本主義に固有の植民地（資源）問題と社会政策問題とは、後進国ドイツに特に深刻であった。1917年ロシア革命は、ヨーロッパの経済体制の存立可能性を鋭く問いつめた。

ウェーバー、ゾンバルト、ミーゼス、シュムペーター、クスケはこの時代の経済学者であった。いずれも、近代ヨーロッパに成立した経済体制の存立可能性という問題に直面した。マルクスはすでにこの経済体制に“否定”の答えを出していた。ウェーバー以下の答えは何であったか？ ウェーバーの「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」は、この問題への代表的な答えであった。ウェーバーは、マルクスの答えを否定した。ウェーバーは、経済体制を根本的に規定するのは“生産関係”であるというマルクスの立論を否定して、その根底にこれをしも規定している“倫理及び精神”の存在を明らかにした。ここにドイツ歴史主義は、二分流を形成する。歴史の根本規定は、“物質か、精神か？”この究極的問いをめぐる死闘が胚胎した。この問題の二者択一性を否定する者は、この問題の深みを知らないものである。

歴史の“規定”をめぐるマルクス批判が起こされると時を同じくして、歴史の“形成”をめぐるマルクス批判が起こされた。歴史は、マルクスの説くように“法則”の定めるところなのだろうか？ もしそうならば、人間は歴史への責任を問われるだろうか？ もし責任をまぬがれて無責任に生き抜いた人間が、これも“法則”によって共産主義の新世界で現世的終末を迎えるとするならば、この新世界とはいかなる人間の世界なのだろうか？ 頼山陽の“青史に（名を）列せん”というあの深い歴史意識はマルクスの歴史観にない。二十世紀初頭、ドイツの「哲学的人間学」(philosophische Anthropologie)の研究者 — ウーキュル、プレスナー、シェラー — は、このようなマルクスの歴史観の空理性を衝いたのである。歴史を規定する“精神”，歴史を形成する“人間”，このような歴史観の確立は、社会的市場経済の生成と発展とにとって測り知れない影響を及ぼした。

(二) 職業としての経済政策

五十年にわたる学問研究を回顧して、ミュラーアルマックはその生涯が「職業としての経済

アルフレッド・ミュラーアルマックの経済秩序論

政策」(Wirtschaftspolitik als Beruf)⁽⁹⁾であったと語る。経済政策がこの世の天職であったと
言うのである。国家の経済による救済、これがミュラーアルマックの天職であった。経済政策
による国家の救済は、政治の季節から経済の季節へと時代の転換を迎えていた第一次大戦後の
ドイツにおいては時代の要請であった。⁽¹⁰⁾

ミュラーアルマックは、オイケン、エアハルト、レプケと同じく生涯に三度——ドイツ帝国、
ワイマール共和国、第三帝国——祖国の崩壊を体験した。いずれも、崩壊の原因を経済の中に
持っていた。国家の興亡が経済との深い係わりの中で起っていることは、この世代の経済学者
の様に痛感させられたところであった。経済学は、この世代の学究にとって文字通り、「経
国済民」⁽¹¹⁾の学に他ならなかった。

ミュラーアルマックの学問的、実践的生涯は三つの時期に区分出来る。

I期 1920年代—30年代 景気理論が研究の主題であった。この時期の主著「景気政策の経
済理論」(Ökonomische Theorie der Konjunkturpolitik 1926年)「資本主義の発展法則」
(Entwicklungsgesetze des Kapitalismus 1932年)

II期 1930年代—45年代 ナチスの擡頭により、事実上経済理論の研究が不可能となる。か
ねて関心の深かった宗教社会学への研究に沈潜する。ウェーバーの宗教社会学を継承し発展さ
せる。この時期の主著「経済様式の生成史」(Die Genealogie der Wirtschaftsstile 1944年)

III期 1945年代—65年代 年来の経済体制の研究を基礎にして、エアハルトの同労者となり
社会的市場経済の形成に参与する。この時期の実践活動は、社会的市場経済と統合ヨーロッパ
の形成とから成る。この時期の主著「管理経済と市場経済」(Wirtschaftslenkung und Markt-
wirtschaft 1946年)

ミュラーアルマックの三期にわたる研究は、⁽¹²⁾経済体制の探究と形成とに捧げられている。景気
理論も、宗教社会学も、経済秩序論もすべては、経済体制をめぐる研究であった。「往時を回顧し
て私の為した最も重要なことは、経済政策に対してもつ秩序思想の意味を発見したことではな
かったかと思う。」⁽¹³⁾とミュラーアルマックは語るのである。

(三) ドイツの統一

社会的市場経済は、三つの理念を包摂する経済体制である。自由を理念とする経済、正義を
理念とする社会、平和を理念とする政治の統一体、これが社会的市場経済の全体像である。経済
体制、社会体制、政治体制⁽¹⁴⁾の三者が社会的市場経済の全体像の中で、三つの理念とともに一つの
統一体に融合する。従って、社会的市場経済は単なる経済体制でなく、単なる社会体制でなく、
単なる政治体制でもない。三つの体制、三つの理念の融合した統一体を、「国家」と呼ぶこと
が可能であろう。従って、社会的市場経済の究極の問題がすべて三つの理念の融合をめぐるも
のであるとく、すべての国家の問題もこの融合をめぐるものであるとすることが可能であら
う。

ドイツの地に、理念融合の体制が成立したことは決して偶然であったとは思われない。ドイ
ツはヨーロッパの中原に位置し、東風と西風とは常にこの地で交差する。西から自由の風が吹
けば、東から正義の風が吹く、両風を融和して平和の微風たらしめることは、ドイツの世界史
的使命であるだろう。

ドイツ帝国は政治体制(平和)への経済体制(自由)の包摂の試みであった。ワイマール共

鉢野正樹

和国は経済体制（自由）への社会体制（正義）の包摂の試みであった。第三帝国は社会体制（正義）への政治体制（平和）への包摂の試みであった。この試みはいずれも皆失敗に帰した。第二次大戦後、東には社会体制を主軸とする国家の形成が試みられ、西には融合体制が試みられている。体制の融合、理念の融合が成功するか否かに、社会的市場経済の死生がかかっている。

フランス革命で三つの理念——自由、平等、博愛——が革命のスローガンに掲げられた時以来、理念はその母胎から離されて、いつしか社会階層の手の中でイデオロギーと化せられた。自由は市民層のイデオロギーに、平等は労働者のイデオロギーに、博愛は官僚層のイデオロギーに変えられた。これ以降、イデオロギーとしての自由主義（自由）、社会主義（平等）、国家主義（博愛）は階層の利害と結びつき神々の闘争と称せられるイデオロギー闘争をもたらした。しかし、理念の母胎はマルクスの言うように階層の中にあつたのではない。理念は、元来、教会の教義の中に根ざしていた。理念の母胎は信仰にあつた。官僚、市民、労働者は、社会階層として世界のいたるところに認められるが、自由、平等、博愛がヨーロッパ固有の理念と称せられていることは、この間の消息をうらづける。自由の理念がカルヴィンの教義に、正義・平等の理念がカトリックの教義に、平和・博愛の理念がルターの教義にいかにか深い係わりを有するかは、これを後に説明するであろう。いずれにせよ、社会的市場経済は体制、理念の融合を超えて信仰の融合をも究極の目標に置いていること、ドイツの統一はこれをおいて他にないことは注意しておきたい。

二、ヨーロッパへの道

（一）ヨーロッパへの道

ミュラーアルマックは、1952年（当時五一才）から十四年間、国家特使⁽¹⁵⁾（Staatssekretar für die europäische Integration）の地位に任ぜられ、ヨーロッパ統合の実践的職務に関与する機会に恵まれた。十九才での大学（ケルン）入学から三十数年、自己を理論研究の中に埋めつくして来た学究にとって、一躍実践の中に跳り出することは人生の一大転機を意味していた。当時を述懐したミュラーアルマックの言葉はこうである。「1952年以来、「ヨーロッパ経済開発機構」（OECD）、特に「ヨーロッパ経済共同体」（EEC）に籍を置き、ヨーロッパ統合を目ざすあらゆる局面に関与する機会を与えられたことは、わが生涯最大の贈りものであつた。」⁽¹⁶⁾

この実践的職務の遂行に当り、ミュラーアルマックは一つの信条を堅持した。それは、「全ヨーロッパの統合」という信条であつた。「ヨーロッパは一つ」（Ein Europa）の信条とも言える。二千年の歴史を共有するヨーロッパは、経済史的にも精神的にも一つの統体であるという学問的確信が、この信条の根底にある。ヨーロッパは「運命共同体」（Schicksalgemeinschaft）であつて、この運命の絆は、個人の意志、階級の意志、国家の意志によつても切り裂きえない歴史の摂理であるという信条である。

この信条は、実践の場において一つの成果を生み出した。それは、「ヨーロッパ大の景気政策」（Eine Europäische Konjunkturpolitik）の制度的形成であつた。ヨーロッパ大の協調的景気政策の基礎がすえられた。1960年以来、ミュラーアルマックの提唱に基づき「ヨーロッパ

アルフレッド・ミュラーアルマックの経済秩序論

経済共同体⁽¹⁷⁾の内部に“景気政策委員会”(Konjunkturpolitischer Ausschuß)が設けられ、ミュラーアルマックは1963年の辞任に到るまで委員長を務めた。

1963年1月、イギリスその他の“ヨーロッパ経済共同体”への加盟は、ド・ゴールの拒否権によって実現しなかった。1953年—63年、この十年間に高まりつつあったヨーロッパ統一の機運は、巨人ド・ゴールの一喝によって潰え去ったかの観があった。ミュラーアルマックは、己が信条をくつがえずド・ゴールの決断を前にして実践的職務から退いた。さしずめ日本人ならば、これしきのことで公職をなげうつとは、なんと大人げないことかと評するところであろうが、理論を職分とする者が実践の場で行動する時の出所進退はかくあるべきではなからうか？理論を職分とする者は、絶対、妥協というものをしてはならない。それは、実践を職分とする者のやることである。当時を顧みて、ミュラーアルマックは次のように記している。「1963年、これらの出来事—ド・ゴールの拒否権—の直後、私はエアハルトに—氏は首相選挙を目前に控えていたが—ヨーロッパ問題の国家特使の公職を解いて、再び大学へ帰してくれるように頼んだ。私は、まことに好意的な賛同を与えられたが、この賛同は—エアハルトからだけでなく—アデナウアー政府の閣僚ならびに特使の辞職をえがたい攻撃材料とするであろうような急進的な新聞からも与えられたのである。」

(二) 二つの立場

ミュラーアルマックの国家特使辞任は、ド・ゴールの拒否権に対するものであったが、ヨーロッパ統合をめぐる対立をも浮き彫りにした。それは、理論家と実践家の対立であった。“ヨーロッパ経済共同体”の設立にあたって会議に列した人的構成は、官僚と政治家、それに少数の学者であったというのであるから、この会議が実践家に有利に展開して行ったであろうことは想像に難くない。事実、この会議から生み出された結論は、ヨーロッパの統一という長期的展望に立つというよりも、加盟国の経済的利益という短期的視野に立つものであった。実践派は、十九世紀に開花した自由貿易の再来を期待して、本質的に関税同盟に異ならない経済政策の再興を企てた。これに対して、理論派は自由貿易の弊害を知る故に、自由貿易を共同的に規制する超国家的枠組の形成を企てた。1957年に設立された“ヨーロッパ経済共同体”は、形式的には経済による超国家的枠組であったが、内容的には加盟国の利益共同体にすぎなかった。

ヨーロッパの統合は、一方において米ソ両大国のはざまに立つ群小国家の存立、両次大戦により失墜した威信の回復、交通・通信の発達によって縮小しつつある地理的空間—このような客体的な条件によるものであった。しかし、他方ヨーロッパの統合はヨーロッパ自からがその主体的条件を定めるべき課題であった。この観点からヨーロッパ統合の問題を分析すると、実践派はその主体的条件を「国家の利益」に、理論派は「ヨーロッパの統一」に置いていたと言える。実践派の提唱する自由貿易の諸政策—①貿易の自由化、②関税障壁の廃止、③通貨の自由交換制は、一見自由主義を根底にしているように思われるが、実はこのような政策によって己が国家の経済的利益をあげんとするのであるから、関税同盟と同じようにその根底の思想は国家主義であった。これに対して、国家を超えた制度的枠組を提唱した理論派の根底の方に、自由主義の思想が横たわっている。かくして、ミュラーアルマックのド・ゴールへの挑戦は、その思想の根底において自由主義者ミュラーアルマックの国家主義者ド・ゴールに対するものだった。実践の場における勝敗は、“利”にさとき者の側にある。何故なら、実践の場に

鉢野正樹

おいて不可見なものは、神であれ、理念であれ、秩序であれ説得力をもたないからである。しかし、人間の闘争の究極の審判者は人間であったらうか？ 大きな声が、人間の闘争を決着せしめたであらうか？ 世界を制した者が歴史を制したであらうか？ 歴史という“永遠の相”⁽²¹⁾ (sub specie aeternitatis)の下で人間に係わる真理は決着する。国家の利益が真理であったのか、ヨーロッパの統一が真理であったか、歴史が自らその決着をつけてくれる。

(三) ヨーロッパを統一するもの

ヨーロッパの統一は、果して単なる幻想にしかすぎないのか？ それとも、ヨーロッパの国民をその心底において偽りなく感動せしめる真理なのであるか？ これに答えるものは、一つにかかってヨーロッパの“同質性”(Homogenität)の如何にある。ヨーロッパの外面と内面、生活と思想、経済と精神この両面から同質性を検証するとどうなるか？

まずヨーロッパの外面、目に見える面での同質性を経済史 — l'histoire positive — において観察するならば、古代末期から中世、近代にかけてヨーロッパを包括するような経済史上の特徴が浮かんで来る。中世における陸路、水路、海路を用いてのヨーロッパ世界経済の形成(遠隔地貿易)、近代における企業経営による経済の形成(資本主義)は、いずれもヨーロッパの全域にわたり同時にヨーロッパに限定された経済史的特色であった。

次に、その内面、目に見えない面での同質性を精神史 — l'histoire negative — において観察するならば、古代から現代に至るまでキリスト教以外に宗教らしい宗教をもたなかったヨーロッパにとってその同質性は問うまでもない。しかし、キリスト教は古代末期において二大宗派 — 東、ギリシャ正教と、西、ローマ・カトリック教会 — に分かれ、近代において三大教派 — カトリック教派、ルター教派、カルヴィン教派 — に分かれている。

ヨーロッパ精神の生成史は、ミュラーアルマックの「ヨーロッパ文化形態の年輪」(Wachstumsringe unserer Kulturform 1948年)と題する論文に興味深く描かれている。次にその要旨を紹介してみよう。

○ 第一年輪(東洋と西洋の分離)ギリシャ・ローマの古代文化に、キリスト教が接木されてヨーロッパ文化が発生した。キリスト教は古代世界にいかなる変革をもたらしたか？ 東洋の宗教が、仏教にしてもヒンズー教にしてもイスラム教にしても — 程度は異なるにせよ、儒教も神道も — 現世否定的な“世界観”(Weltanschauung)を生み出したが、キリスト教のみは現世肯定的な世界観を生み出した。東洋の宗教が、世俗の外に“祭礼化”(Ritualisierung)したのに、キリスト教は世俗の中に入り込んでこれを“倫理化”(Ethisierung)せんとした。世俗と意識的に対決せんとする姿勢は、キリスト教の伝統の中に今も脈々として流れている。“現世”(Immanenz)への“超現世”(Tranzendenz)の対決が生み出された。“現世”への高踏的な態度である。この対決の中から、ヨーロッパ精神に二元論的対立が起って来た。①古典古代対キリスト教、②原始キリスト教対ローマ・カトリック教会、③東ローマ対西ローマ、④皇帝対法皇、⑤カトリック対プロテスタント、⑥宗教文化対世俗文化、このような二元論的対立の中からヨーロッパ文化様式の多様性が生じて来た。ヘーゲル、マルクスの弁証法は、このような精神風土の外では考えられない。

○ 第二年輪(東欧と西欧の分離)東西教会の分裂により、キリスト教世界に教会形成の二つの原型が成立した。東欧の教会は、宗教的真理としての“神の言”(λογος)はこの下に参集す

アルフレッド・ミュラーアルマックの経済秩序論

る信仰者集団を自ら統帥する神秘力を有するとの教義に立ち、無組織的な教会形成を理想とした。これに対して西欧の教会は、参集する信仰者集団は“神の言”に自ら帰服するほど恭謙でありえないとの教義に立ち、組織的な教会形成を理想とした。西欧の教会は、ローマ法を受容して法律規範に基づく組織教会を形成した。かくして西欧においてのみ、世俗における権力統治体たる国家に超絶する超世俗の宗教組織体たる教会が成立した。国家と教会との対立は、西欧中世史を貫ぬく根本的特徴である。両権力主体の間に立って、中世に固有の身分制度と都市制度とが発達出来た。

○ 第三の年輪（中世と近代の分離）宗教改革によって起ったプロテスタンティズムは、ローマ・カトリックを否定する点においては一本の流れであったが、教会の形成においては対照的な二つの流れを生み出した。ルター派とカルヴィン派とは救いの教義——教会の外に（聖書の中に）救いあり——において革新的であったが、教会の形成においては古いものを継承したにすぎなかった。ルター派は、東欧のギリシャ正教に類似し、無組織的な教会形成を理想としたために却って世俗の国家に包摂されてしまった。ドイツ国教会がこれである。これに対して、カルヴィン派は西欧のローマ・カトリック教会に類似し、組織的教会の形成を行なった。自由教会とその分派（セクト）がこれである。国家との対決の故にカルヴィン派に宗教的迫害はまぬがれ難く、ヨーロッパ、アメリカにカルヴィン派キリスト教徒は分散、移住する結果になった。ルター派とカルヴィン派の教義についてはのちにこれを述べることにする。

三、社会的市場経済の生成

（一）その胚胎 1945—48年

1933年から48年（通貨改革）まで、ドイツの経済体制は“自由”の否定の上に立っていた。自由の否定の上に立つ経済体制は、原理的に経済過程（生産・分配・投資）の決定権を社会と国家に集合させるものである。個人や企業の決定権は極度に圧縮されることになる。個人と企業が集团的に市場で形成していた決定権が、社会や国家のそれに従属させられることになる。経済過程が社会や国家（労働団体や官庁機関）に服従させられることにより新しい経済体制が成立する。経済過程が、個人と企業——市場——に委ねられていた場合とは全く種類を異にする経済体制の成立であった。この経済体制を、「市場経済」(Marktwirtschaft) ⁽²²⁾ に対して「管理経済」(Wirtschaftslenkung) と呼ぶことにする。「管理経済」の本質は、市場の極度の規制の中にある。経済体制のすべての論争は、市場なくして経済過程の運営が可能か否かをめぐって展開されて来た。要は、経済運営が上から——社会、国家——か、あるいは下からからか——個人、企業——かの問題に帰着する。これは、古くて今なお新しい問題である。

第一次大戦後、フォン・ミーゼスは市場経済への干渉——価格の規制——が単にこれだけに終らず、生産規制、分配規制、投資規制に及ばざるをえないことを明らかにした。帰するところは経済の全体規制である。市場経済の全体規制は市場経済からその二大要素、①価格機構と②競争原則を奪いとる。この結果、経済からは、活気と秩序が失なわれる。管理経済の①計画と②ノルマとはこれに代わるものとはなりえない。失なわれた活気と秩序によって生じて来る生産の停滞を、信用拡大によって改善せんとするならばその経済的帰結は明らかである。スタグフレーションの根本的原因はここに伏在する。フォン・ミーゼスの予言は、不幸にしてナチス国

鉢野正樹

家の運命に的中した。

戦後1945年—48年まで、ドイツの経済は①過剰通貨と②停止価格とによって悪性インフレーション⁽²³⁾を起し、生産は完全に停滞した。この現象は、フォン・ミーゼスの予見していた管理経済の運命に他ならなかった。ドイツ経済の再建は過剰通貨を縮小し、停止価格を廃止して市場でものが売買出来るような経済秩序を回復するより他に道がなかったのである。エアハルトの通貨改革や統制撤廃はこの理論の実践に他ならなかった。しかし、生産設備の破壊、原料資源の不足、交通機関の不備などを復興を妨げる原因にあげる者は多かったが、経済秩序の回復に復興の鍵を見る者は少なかった。ミュラーアルマックは、この少数の者の一人であった。

(二) その誕生 1948年—60年

社会的市場経済は、体制概念として1920年—30年代の経済体制研究者の中に胚胎していた。その根本的問題は、両刃の剣のような市場経済を国家の建設にどのように役立たしめるかということにあった。国家主義、社会主義のように市場経済を規制することは不可であった。しかし、自由主義のように市場経済を無規制のままに放任することも、内部経済的—社会問題の発生—に、外部経済的—国際紛争の発生—に許容されえなかった。従って、全ては市場経済の二律背反—規制も不可、無規制も不可—の克服如何にかかっていた。かくして、経済体制の研究は市場経済の調和ある発展を求めてあるべき経済秩序を模索する。

ミーゼス、ハイエク、レプケ、オイケン、ウェーバー(アドルフ)、ベーム、ランペ、ディーツェ、ドーデなど新自由主義者と呼ばれる経済学者は経済秩序の探索者であった。この新自由主義者達は、ドイツにおいてオイケン、ベームを中心とするフライブルグ学派、イギリスでハイエク、ポッパーを中心とするロンドン学派、アメリカでミーゼス、フリードマンを中心とするシカゴ学派を形成した。

社会的市場経済が西ドイツにおいて誕生した時、この経済体制の中核は市場経済であったが、もはや十九世紀に全盛を誇った市場経済の単なる復興ではなかった。この新しい体制を支えた思想が、もはや自由主義のみでなく、社会主義も国家主義もこの中に包摂されていたからである。社会的市場経済の思想的基礎は、思想融合によって成る。この意味で、社会的市場経済は単一思想、単一イデオロギーの体制ではない。資本主義体制が自由主義をイデオロギー的基礎としているのに反し、社会的市場経済は単一イデオロギーの基礎を排除する。何故ならば、思想融合、イデオロギー融合なくして社会階層の融和がありえないからである。イデオロギーの闘争は、社会階層の闘争でもある。この闘争の止まぬ限り、分裂なき国民の形成も、従って平和な国家の形成もありえない。イデオロギーの闘争は、市民層が“自由”を抱きこんで自由主義を形成し、官僚層が“平和”を抱きこんで国家主義を形成し、労働者が“正義”を抱きこんで社会主義を形成したことを発端とする。イデオロギーの闘争を鎮めるには、まず自由、平和、正義を社会層の手の中から解放することである。そして後、自由を経済の理念とし、平和を政治の理念とし、正義を社会の理念とし、理念をその本来のあるべき位置へと復せしめることである。このようにしてはじめて、経済体制、政治体制、社会体制の確立が可能となる。市場経済を国家体制の中で独断専行せしめないためには、三つの体制の調和を計ることによってこれは達成されよう。市場経済は、この国家の体制の中において自らの規制を受けることになるだろう。ミュラーアルマックが社会的市場経済の目標として掲げた二つの目標、①経済的自由と

②社会的正義⁽²⁴⁾はこの国家において矛盾なく達成されるであろう。

(三) その成長 1960年以降

西ドイツ経済は、1950年代に復興期を終り60年代には成長期に入った。50年代とは異なった新しい種類の問題が生じて来た。第一段階は経済的問題(①生活必需品の供給, ②生産の回復, ③国内の製品, 資本市場の整備, ④通貨制度の確立, ⑤世界経済への復帰⁽²⁵⁾)に、第二段階は社会的問題に直面した。経済の民主的発展によって貧富の経済的格差は縮少し、「階級なき社会」⁽²⁶⁾(Klassenlose Gesellschaft)が興りつつあった。完全雇用による雇用の確保も、景気上昇による所得の増大も国民の満足を与えるものとはならなかった。困窮問題の解決とは裏腹に、不満が国民の間に高まった。この段階での社会政策は、もはや①財産, ②住居, ③株式などの物質的保障ではすまなくなった。物質的生活の向上とは裏腹に、軽微な価格の変動に社会的な動揺が生じ、労資の対立は復興期にもまして激しくなった。この第二段階の時代の特徴を、当時経済大臣であったエアハルトは、「アトム化」⁽²⁷⁾(Atomisierung)と名づけたのである。市場経済に固有の問題とされていた①内的問題(独占の形成, 貧富の格差, 景気の変動)も、②外的問題(公共事業, 社会福祉)も財政, 金融政策の運用によって基本的には解決出来る問題となっている。しかし、新たに起りつつある問題は経済政策によって解決されるべきものでなく、社会政策を必要とするものであった。この問題の解決には、その由来を把握せねばならない。

人間の問題は、①経済, ②社会, ③精神の三つの層において診断すべきである。人間の存在論的構造は物質と精神の二元論によってではなく、経済, 社会, 精神の三層に分析すべきである。オルテガ, ヤスパース, レプケの精神, 社会病理学は“大衆社会”(Massengesellschaft)の中に問題の所在を見出した。大衆社会の中で、人間の社会的, 精神的故郷亡失性が起っている。人間の故郷亡失性はどうして生じて来たのか?

経済が高度に発達した産業社会の本質は、機械と組織の中にある。機械と組織とは経済に福祉をもたらした反面に、人間の意志も感情も冷たくつき放すヤヌスの顔をもつ。人間の物質的欲望に支えられて高度に成長した産業社会は、人間の生活空間を物質的にも精神的にもアスファルトとコンクリートで塗り固めてしまった観がある。機械も組織も、元来、自然科学が生み出したメカニズムである。機械生産も組織生産も、生産者と生産物の間に完全な分断を要求する。生産物と触れ合いながら生産に従事したいという中世職人的精神は、機械と組織の前で無惨に踏みつぶされて息絶えた。この非情の現実に耐えて行けない人間は近代という時代を生きぬけない。ウェーバーが合理的精神とは、この非情性に耐えぬく精神であると言うのは至言である。産業社会は、人間に耐え難き非情性を要求しながら、その反面で高度の生産性をあげて来た。産業社会もまた両刃の剣である。産業社会のもつ二律背反(生産性と非情性)をどのように克服するか、これからの社会政策の根本的問題はここにある。

四、経済様式説

(一) 歴史主義の生成

経済は自然的過程なのか、あるいは歴史的過程⁽²⁸⁾なのであるか? 経済の認識論的対立はここにある。経済を自然的過程と認識することから、経済の理論的研究は出発する。経済を自然と

鉢野正樹

同じように自己の外部に対象化し、自己から切断された客体を見すえることにより理論的研究が可能となる。それは、自然を自己から切断された客体として見すえることにより理性の純粋な適用が可能となったのと同じことである。自然科学の驚くべき発達は、この思惟の論理の上に固く立つ。自然と自己との断絶、この厳しい思惟の論理が受容された時から、自然科学の発達が約束されたのである。自然と自己の断絶に連綿とする精神——詩人の魂——は自然科学のものでない。自然科学発祥の地は、総じてカルヴィン派の国々（イギリス、フランス）であった。カルヴィン派の教義が、自然科学の思惟を発達させたからである。カルヴィン派の教義は、自己と現世との峻別を求め聖俗の境界を求めたため、外界を対象化し外在化する思惟の論理を生み出した。カルヴィン派の教義“予定説”（Prädestinationslehre）が生み出した世俗内禁欲の信仰生活、戦う教会の形成、科学的客観精神これらすべては一つの系列に属している。

経済を自然的過程としてでなく歴史的過程と認識することから、経済の歴史的研究が出発する。経済を自己の外部に対象化せず、経済との自己同一化を追求することに歴史的研究の本領がある。このような研究が、自然科学に対する精神科学の国——ドイツ——に起ったのも故なしとしない。ルターの教義は、現世との接触、自己同一化を求めたからである。ルター派の教義“職業”（Beruf）は、現世の職業に仕えることが神に仕えることであると教えている。現世の職業に仕えるためならば教会の礼拝を休むも可、何故ならば職業に仕えることは神に仕えることなのだから。職業は神の与えた天職である。このような教義から、どうして戦う教会が起りえようか？

ドイツ歴史主義は、ルター派の教義に源流を汲む。歴史主義の発端は、カトリックのドグマ——神の意志から超越的に歴史解釈を行なう——への批判から起って来た。歴史の内在的な解釈は、神の意志から歴史のすべての生起を切り離し、歴史に内在する①気候、②人種、③風俗、④習慣⁽²⁹⁾などに歴史の生起を結びつけた。歴史主義は、歴史の生起を何に結びつけるかによって、すでに述べたように二つの流れに分かれて展開する。歴史の生起を“物質”に結びつけたマルクスと、“精神”に結びつけたウェーバーの流れである。マルクスは、ヘーゲルの歴史主義とリカードの合理主義を結合して固有の歴史観を形成した。マルクスの歴史観が、法則的、超越的性格をもつのはこのためである。ウェーバーの歴史観は、歴史主義の伝統を離れず歴史を内在的に精神的に理解する。

（二）理念・秩序・政策

ミュラーアルマックは自己の学問的位置づけを歴史主義の中に、しかも歴史学派の経済様式説の中に置いている。このことは、ミュラーアルマックの学問的源流が究極的にルター主義の中にあることを示している。ミュラーアルマックの経済政策の根本に、社会的市場経済の形成においても、思想的＝宗教的融和⁽³⁰⁾（Irenik）が目標とされているのはこのためである。思想的＝宗教的融和は主客の分離を道とするカルヴィン主義からは起りえず、主客の合一を道とするルター主義からのみ起りうる。

経済様式説は、①十七世紀の国家学、②十八世紀のヘルダー、メーザーの民族学、③十九世紀のミュラーのロマン主義、リストの国家主義、経済段階説を経てウェーバーとゾンバルトによって確立した。ウェーバーとゾンバルトの業績は、十九世紀に専門化によって分化した事実研究と理論研究を再び結合したことにあった。ウェーバーは資本主義の成立をプロテスタント

アルフレッド・ミュラーアルマックの経済秩序論

の精神から説明し、ゾンバルトは十四世紀イタリア・ルネッサンスの合理精神から説明した。ウェーバーもゾンバルトも経済様式を、その時代の精神から説明した。経済段階説は経済形態（自然経済 — 貨幣経済 — 信用経済）を、①生産方法、②交換方法、③生産から消費への距離などのように外面的に説明したが、経済様式説はウェーバーのプロテスタント禁欲精神にし、ゾンバルトのルネッサンス合理精神にせよ内面的にこれを説明した。

経済様式が時代精神に規定されるならば、経済政策はこのことを無視出来ない。経済政策は、経済様式と時代精神を結合するものとなる。ミュラーアルマックの経済政策が、経済様式と経済精神を意識的に結合するものであったことはすでに見て来たところである。社会的市場経済においても、統合ヨーロッパの形成においても、経済様式（経済秩序）— 社会に規制された市場経済、共同的に規制されたヨーロッパ関税同盟 — が経済精神（経済理念）— 経済的自由・社会的正義、ヨーロッパの統一 — との結合において構想されている。

（三） 経済様式説の展開

ウェーバーとゾンバルトが十六世紀を中心に行なった資本主義の経済様式的研究を、ミュラーアルマックは継承した。経済様式の時代精神からの説明である。ヒトラー時代から十五年間没頭した精神史研究は、以下の論文と著書にあらわされている。①「ヨーロッパ文化形態の年輪」(Wachstumsringe unserer kulturform 1948年) ②「経済様式の生成史」(Genealogie der Wirtschaftsstile 1943年) ③「神なき時代」(Das Jahrhundert ohne Gott 1948年)。

この論文と著書は、①が十六世紀のヨーロッパ近代に至るまでの精神史、②が十六世紀から十九世紀に至る近代の精神史、③が十九、二十世紀の現代における精神史である。「経済様式の生成史」によって、ミュラーアルマックの素描した世界史の精神的時代区分を見ておくことにしよう。

- I. マギー (Magie) の時代 — 世界は、全てが混然一体と見られていた時代。この世とあの世、生と死、動物と人間の境界が設けられていない時代。すべてが生ける実在であった。マギーの時代は、四海同胞の世界観を生み出した。原始的平等の時代、社会階級は生じなかった。
- II. アニミスムス (Animismus) の時代 — 世界の二元論が起って来る。目に見える俗なる世界と、目に見えない聖なる世界が分離する。俗なる世界は、聖なる世界との結びつきによって生かされていると見られるようになる。物質と生命、実体と象徴との分離が起る。アニミスムスの時代は、万物に仏性宿るの世界観を生み出した。万有を生かしめる精霊と交通する霊媒者の集団が形成された。人間の間にも社会階級の区分が生ずる。精霊を知る者と精霊を知らぬもの、賢者と愚者との区分が生じた。祭司と平民の区分である。精霊の媒介を依頼する供物の必要から、財貨の交換と分業が生じて来た。
- III. 多神教の時代 — 聖なる世界は俗なる世界から超越すると見られた時代。物質に生命は内住せず、象徴に実体が内住せず、万有に精霊は内住しない。両者の間も分離した。分業によって生じた生業に、それぞれの神々が祭られた。神々によって閉鎖的な社会が形成された。交換と分業は衰退し、戦闘が社会の間に絶えなかった。
- IV. 一神教の時代 — 生業の神々に仕える祭司と、唯一の神に仕える祭司の間に区分が生じた。自然的祭司と道徳的祭司の間に区分が起る。俗なる祭司と聖なる祭司の区分である。この区分から祭政の分離が生じて来る。中世ヨーロッパの国家と教会の対立は、この祭政分離の線

鉢野正樹

上に起っている。

V. 宗教改革の時代 — 宗教改革は国家と教会との対立を解消し、この対立の故に成立しえた封建制度をゆるがした。身分制度と都市制度の危機が生じて来た。農村と都市の危機でもあった。カルヴィン主義の地域では、国家の権力への対抗権力が都市の中から生じて来た。いわゆる“市民層” (Burgertum)の形成である。市民層は、カルヴィン主義のエトスの持ち主であった。世俗内禁欲、国家へ抵抗する教会の形成、そして自由主義すべてはカルヴィンの教義を母胎にもつ。これに対してルター主義の地域では、国家へ奉仕する封建貴族が農村の中から生じて来た。いわゆる“官僚層” (Beamtentum)の形成である。官僚層は、ルター主義のエトスの持ち主であった。世俗内奉仕、国家へ服従する教会の形成、そして国家主義すべてはルター主義の教義に由来する。ヨーロッパに生じた“自由”の概念は両義的であって、カルヴィン主義とルター主義とでは対照的な意味をもつ。前者の自由は「～からの自由」(Freiheit -von)⁽³¹⁾、後者のそれは「～への自由」(Freiheit -zu)であって意味が全く異なっている。前者を政治的自由、後者を精神的自由と言ってもこの相違は尽くせまい。戦後日本の社会的混乱は“自由”の混乱に由来するが、自由の真の理解が出来ないことにはこの混乱は永久に鎮まるまい。

五、宗教と経済

(一) 神なき時代

近代は、精神的に二つの時代に区分される。宗教改革の時代と、世俗化の時代である。前者は信仰復興の時代であり、後者は信仰頹落の時代である。ヨーロッパにおける信仰放棄の徴候は十八世紀に始まった。十八世紀啓蒙主義時代の信仰放棄は、わずか知識人のものであったが、十九世紀大衆化時代に入って一般民衆の間に広まった。信仰の頹落現象は何故生じて来たのだろうか？ それは、啓蒙主義が本質的に宗教改革に担われたルネッサンスであったからである。⁽³²⁾ルネッサンスのもつ人間の発展意欲、そして宗教改革のもつ信仰規範が調和している間はまだよかった。しかし、この緊張関係はいずれ破られる運命にあった。潜在的に信仰規範を嫌忌している人間が信仰放棄に走るのには目に見えたことではあるまいか？

ヨーロッパ十九世紀の精神的特徴となった信仰放棄 — 世俗化 — は、信仰の対象を失なった時代を生み出した。“神なき時代”とはこの時代のことである。この時代のとるべき道は、①信仰の対象を神以外に求める偶像崇拜か、②すべての信仰を否定する虚無主義かのいずれかしかない。事実、十九世紀ヨーロッパの世俗化とは、虚無主義を底流にした偶像崇拜に他ならなかった。価値観の多様化という社会現象も、世俗化の中で生じて来た。

世俗化の時代に、信仰に結合していた理念は信仰から切り離されてイデオロギーとなった。自由主義、国家主義、社会主義は、神なき時代に偶像化した理念である。信仰を離れて、自由主義は市民層の、国家主義は官僚層の、社会主義は労働者のイデオロギーという名の偶像となった。現代において、イデオロギーの闘争は融和の余地なき宗教戦争の様相を呈している。イデオロギーの闘争の中から、人間の社会は救い出されるのであろうか？ そのためには、イデオロギーを社会的階層の利害から解放して、本来の理念へともどしてやることではあるまいか？ 自由主義はカルヴィン主義の中へ、国家主義はルター主義の中へ、社会主義はカトリック主義の中へともどしてやることではあるまいか？ イデオロギーの相互理解は、イデオロギーの宗教

的根源の相互認識を前提とするものではあるまいか？ 思想の和解は、宗教の和解にまで至らねばならないのではあるまいか？

(二) カトリック主義、ルター主義、カルヴィン主義

中世は、世俗を統治する国家と超世俗を統治する教会とが現世において相互に牽制しあう世界を生み出した。教会が国家に対抗しうる権力を確立することが出来たのは、教会における僧侶の世俗外禁欲の生活に由来する。僧侶の三徳とされているものは、独身、服従、清貧であったが、人間の禁欲生活はこの僧侶生活に極まるものであろう。平信徒の聖職者への崇拜の念は、この禁欲生活の中に根ざしている。教会の身分制度（ヒエラルヒー）は、このような禁欲生活における聖俗の区別から生じて来た。教会における人間集団の統治形態が、このような平信徒と聖職者との間に結ばれた崇拜と慈愛との関係を社会の形成原理としていたことは、国家における人間集団の統治形態が、権力による支配と被支配との関係を形成原理としたのとは対照的であった。教会がその社会形成の原理を、厳格な三徳厳守においている限り、国家に対して対抗勢力となりえ、特にローマ・カトリック教会は古代ローマから継承した法制度を教会の中に受容し、教会法の規範をもって教会における人間集団を統治したために、教会の国家への対抗統治体としての地位は固かった。

教会と国家との勢力均衡の上に立って、中世封建時代の身分制度(stände)と都市制度(stadt)との発達が可能となった。身分制度の頂点には貴族、都市制度の頂点には富者が立ち、国家と教会との間に中間的な地位を占めることが出来た。カトリック主義の教義は、現世を部分的には神聖に、部分的には世俗と見ていたために、ルター主義とカルヴィン主義に表われる現世観の分離は生じていなかった。中世の手工業者の中に生産はあくまで生産者と生産物との一体感の中で進められるべきもので、機械によるこの一体感の切断を拒絶するギルド精神が抜けなかったのはこのためであった。機械を入れて、生産者と生産物とを分断することが出来るためには、カルヴィン主義の現世観に待たねばならなかった。ルター主義の中から、ロマン主義者が生まれアダム・ミュラーのように中世を讃美する思想家が出たのも、ルター主義の中にカトリック主義の中にもあった現世を神聖視する現世観が流れていたからである。

宗教改革が起こしたもっとも大きな変動は、国家と教会の勢力均衡の破壊ということであった。この勢力均衡の破れによって、国家の権力が圧倒的に増大することは必然の結果であった。宗教改革は、ルター主義においてもカルヴィン主義においても救いの究極の根拠を、教会の権威から切り離し、聖書の中におくことによって開始した。救いの根拠が、教会を離れ聖書の中におかれることによって、教会は救いの機関としての存在意義を失なった。“教会の外に救いなし”というカトリック教会の永遠の基礎がここにくつがえされることになった。教会の内部での聖職者と平信徒の身分制度（ヒエラルヒー）は、カトリック教会を除いてプロテスタント教会では解消してしまった。この教会的身分制度の崩壊は、中世の世俗的身分制度にも波及した。貴族と農民、親方と徒弟などの身分制度の崩壊は、教会内部のヒエラルヒー崩壊の反映である。

十八世紀の絶対主義国家の形成過程において、プロテスタント教会の国家に対する立場はルター主義とカルヴィン主義とでは対照的であった。それは、両派の世界観の相違に基づくものである。現世を神聖なものとするルター主義の世界観は、教会に国家に対しても融和的な立場をとらしめた。この結果、ルター主義の教会は国家に包摂される国教会を形成した。教会は国

鉢野正樹

家に仕えることによって国家を聖化すべしというルター主義固有の教義がここに現実化する。ウェーバーの言うルターの職業観 — Beruf — もこの線において合致する。教会の国家への立場は、個人の現世への態度に反映している。現世に服従すること、現世と一体となることによって現世を聖化せんとするのがルター主義固有の伝道である。ルター主義の職業観から、国家に奉仕する官僚が生み出された。官僚のエトスは、単に国家に奉仕するのではなく、国家に奉仕することを通して現世の国家を聖化することに究極の目標がある。国家に仕えることを通して神に仕えるのである。国家は神でなく、これも神に仕える高次の主体にすぎない。世俗化の時代に、国家が自己目的化され神格化され、国家主義を生み出したが、何処に根本的な誤りがあったかはこれにおいて明らかであろう。官僚の本来のエトスが何であったかを知れば、俗悪な国家主義から国家主義本来の姿を救い出せるであろう。

カルヴィン主義の世界観は、現世を世俗なものと見るので、この世との対決の姿勢はくずさない。ここからウェーバーの言う世俗内禁欲というピューリタンの生活が展開される。カルヴィン主義の教会は、その教義からしてルター主義の教会のように国家と一つになることはありえない。絶え間なき自己浄化、自己批判、他者批判、そしてこの世との対決、これがカルヴィン主義教会の宿命である。カルヴィン主義の自由教会が、今だに“分派”(Sekten)の分かれが絶えないのはここにその根本的原因をもつ。カルヴィン主義は、“この世はこの世、神の国は神の国”⁽³⁵⁾このはっきりとした世界観に立つために現世の権力主体たる国家からは排除されざるをえない。国家から排除されたカルヴィン主義者は、国家の基幹産業たる農業生産を離れ、都市の手工業生産に従事せざるをえなくなった。この職業分野でカルヴィン主義者は、世俗内禁欲生活を実践した。中世の僧院のモットー“祈れ、そして働け”⁽³⁶⁾が世俗内生活のモットーになった。カルヴィン主義者にとって、企業の利潤は労働の結果であって決してその目的ではなかった。ルター主義の官僚にとって国家それ自体が目的とならなかったように、カルヴィン主義の市民にとっても、利潤、労働、企業それ自体が目的とされることはなかった。官僚が国家を通して神に仕えたように、市民は企業を通して神に仕えたのである。世俗内禁欲は神に仕える道であったので、名誉・栄達・利潤に仕える道ではなかった。

(三) 思想 — 宗教融合

ヨーロッパの三つの教義、カトリック主義、ルター主義、カルヴィン主義はヨーロッパの歴史を表裏において規定した。経済史 — l'histoire positive — も精神史 — l'histoire negative — もその根底に三つの世界観の流れをもっている。

ミュラーアルマックは、社会的市場経済の形成と統合ヨーロッパの形成を実践の二つの課題にしていたが、この二つの形成体の根本にヨーロッパ固有の思想、宗教の融合を忘れなかった。ミュラーアルマックの経済政策は、根本的に融合政策であった。ヨーロッパの統一も、ドイツの統一も根本的に思想と宗教の融合を措いては考えられない。自由主義、国家主義、社会主義の思想融合は、まずその主義の根源についての相互認識を前提にする。市民層、官僚層、労働者の間に利害の対立は残るだろう。しかし、社会階層の利害調停の前に、イデオロギーの調停が必要である。イデオロギーの相互認識が決着するだけで利害の調停はどれほど容易になるか測り知れない。

カトリック主義、ルター主義、カルヴィン主義もその根本的対立が教義の相違から来る世界

アルフレッド・ミュラーアルマックの経済秩序論

観の相違にあることを相互に認識し合うことである。ルター主義の“信仰義”の教義も、カルヴィン主義の“予定説”の教義もカトリック主義の中にすでに分有されている。カトリック主義を母胎とする教義上の相互理解は困難なことではない。カルヴィン主義の世俗内禁欲も、ルター主義の職業観もともに市民と官僚との間に勤労の意欲を刺戟して資本主義に固有の動態的性格を与えるに至ったことは疑いえない。企業の形態は、自由企業と国家企業と異なっていたがその発展の原動力はともにプロテスタンティズムに固有な職業倫理の中にもっていたのである。しかし、このようにして発展して来た産業社会は、マルクスの言う機械と組織による人間疎外の社会となってしまった。この産業社会が機能性を失なわずしかも人間性を失なわないためにどうしたらよいのであろうか？ この解決のためにも、カルヴィン主義とルター主義の融合が必要である。カルヴィン主義の対象との分離精神によって生み出された産業社会の機能性を、ルター主義の対象との合一精神による人間性によって補完せねばならない。今や機械と組織の論理は、企業の中ばかりでなく学校にも教会にも、最後に家庭の中にもまで滲透して来た。企業において、学校において、教会において、真面目な社員、教師、牧師達が真面目なればなるほど機械と組織の冷い論理にドンキホーテ的な戦いを敢行している。こういう人達は、ウェーバーの言う非情を耐える合理的精神を自己のうちにもたねばならない。その上で、マーシャルの言ったwarm heartをもって一隅を照らす者となってもらいたい。ミュラーアルマックの宗教社会学は、深い洞察をもって、産業社会に行くべき道を示している。

註

- (1) 1973年6月25、26日の両日、ボン・バード・ゴードスベルグで開かれた第37回 Aktionsgemeinschaft Soziale Marktwirtschaft (社会的市場経済への協調行動)の研究会(主宰者、アレキサンダー・リュストウ)での講演。共通テーマは、「回顧二五年」(25 Jahre voraus)であった。
- (2) Alfred Müller-Armack: Genealogie der Sozialen Marktwirtschaft 1974 S.244
- (3) a. a. O. S. 244
- (4) ドイツ人宣教師ゴットホルド・ベック師が、私にこの点に注意を促がされたことがある。神の“試練”は“天国”への誘いである、と。
- (5) a. a. O. S. 244
- (6) a. a. O. S. 246
- (7) a. a. O. S. 249
- (8) a. a. O. S. 249
- (9) Alfred Müller-Armack: Auf dem Weg nach Europa 1971 S. 9
- (10) a. a. O. S. 11
- (11) 酒枝義旗「生活の学としての経済学」昭50年 60頁
- (12) 難波田春夫教授は、ミュラーアルマックとほぼ同世代の経済学者であるが、その研究経歴はミュラーアルマックのそれとほぼ平行する。教授も若き日に景気理論の研究からその学問的生涯を出発し、戦争中は日本の精神的源泉を求めて日本神話の研究、中国古典の研究、ギリシャ哲学の研究に沈潜され、現在、近代的思惟(自同律)の批判の上に立脚して近代的経済理論と政策に批判的研究を展開されている。教授が、その学問的生涯を回顧して、その一貫して研究して来たテーマは“経済体制論”であっ

鉢野正樹

- たと述べられているのはまことに意味深い。「社会経済体制論叙説」 36頁（大東文化大学大学院経済学研究科『比較社会経済体制論』 昭54年）
- (13) Alfred Müller-Armack : Genealogie der Marktwirtschaft 1974 S. 9
- (14) 歴史の主体たる「国家」(Staat)は、「国民共同体」(Volksgemeinschaft)として、「国民権治体」(Volksmachtschaft)として、「国民経済体」(Volkswirtschaft)として三度び認識の対象となるというゴットルの「構成体理論」は、酒枝義旗教授の主宰した「ゴットル研究会」において教授に教えられた。ここで述べたことは、ゴットル経済学に立脚した社会的市場経済論である。社会的市場経済の学者は、ナチス国家主義の影響を恐れてか、“国家”を口にすることに臆病である。このため、この体制論は、経済、社会を大いに論ずるが、国家を敢えて口にしない。社会的市場経済が体制論として確立されるためには、“国家”の概念を正面から明示する勇気が必要である。
- (15) Alfred Müller-Armack : Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik 1965 S. 13
- (16) a. a. O. S. 13
- (17) a. a. O. S. 13
- (18) Alfred Müller-Armack : Auf dem Weg nach Europa. 1971 S. 250
- (19) Alfred Müller-Armack : Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik. 1965 S. 402
- (20) a. a. O. S. 394
- (21) Alfred Müller-Armack : Religion und Wirtschaft. 2. Auf. 1968 S. 22
- (22) Alfred Müller-Armack : Wirtschaftslenkung und Marktwirtschaft. 1946 in Wirtschaftsordnung und Wirtschaftspolitik. 1965
- (23) Alfred Müller-Armack : Genealogie der Sozialen Marktwirtschaft. 1974 S. 16
- (24) a. a. O. S. 90
- (25) a. a. O. S. 129
- (26) a. a. O. S. 132
- (27) Ludwig Erhard : Deutsche Wirtschaftspolitik. 1962 S. 13
- (28) ワルター・オイケンは、物理的、化学的自然は“不変の全体様式”(invarianter Gesamtstil)をもち、経済は“可変の全体様式”(varianter Gesamtstil)をもつと言っている。筆者が、経済が自然的過程なのか、あるいは歴史的過程なのかを問題にした時、オイケンのこの認識を念頭においている。
Walter Eucken : Die Grundlagen der Nationalökonomie. 8. Auf. S. 22
- (29) Alfred Müller-Armack : Religion und Wirtschaft. 2. Auf. 1968 S. 195
- (30) Alfred Müller-Armack : Genealogie der Sozialen Marktwirtschaft. 1974 S. 150
- (31) Ludwig Erhard : Deutsche Wirtschaftspolitik. 1962 S. 589
エアハルトの用語では、„Freiheit von ...“, „Freiheit wofür ...“ となっている。その意味も、筆者とは全く同じではない。筆者の用語により、エアハルトの用語の意味がより鮮明になると思う。
- (32) トレルチ著 内田芳明訳「ルネッサンスと宗教改革」1977年 第20刷
- (33) Alfred Müller-Armack : Religion und Wirtschaft. 2. Auf., 1968 S. 405
- (34) a. a. O. S. 390
- (35) 「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に返しなさい。」新約聖書 マルコによる福音書 12章 17
- (36) Ora et labora (祈れ しかして働け)